

「元日本兵の証言～戦争の現実とは～」

4:42～<http://youtu.be/eqH2X4wtyX8?t=4m42s>

(報道するラジオ 2014年8月8日)

報道するラジオ、今日の特集テーマは元兵士が語る戦場です。レポートは千葉アナウンサーです、こんばんは。

千葉：私が今回お話を聞いてきましたのは、不戦兵士・市民の会という市民グループで戦争体験を語り続けている元日本軍の兵士の方なんです。この方にお話を伺ってきたんですが、このグループはですね、戦争を経験した元兵士の方々が、二度と戦争をしてはいけないという思いを持って、生き地獄である戦争を見てきた証人として、戦場や戦争を語り継ぐために作った会なんです。

私が話を聞きましたのは、谷口末廣（たにぐちすえひろ）さんという方なんです。現在93歳でいらっしゃいます。1920年、大正9年ですね、鳥取県のお生まれなんですけれども、1942年22歳のときに招集をされて日本の兵隊となりました。

そこで幹部候補生としての訓練を受けて、軍曹という下士官の階級になりまして、1944年にフィリピンのミンダナオ島に派遣をされました。そしてミンダナオ島では日本軍の飛行場に勤務をしていました。この1944年という年は、サイパン島で日本が玉砕。つまり全滅した年ですね。

連合国によるB29という爆撃機による日本本土の空襲も始まった年なんです。大きな町では、疎開ですね、「郊外に避難しなさい」という命令が出て、日本国内では竹槍の…本土攻撃に備えた竹槍の訓練が始まったり…していた時です。

水野：敗戦の前の年。

千葉：はいそうです。

水野：まさに泥沼化していた時期ですね。

千葉：敗色濃厚というのが、見えてきた時期でありましたけれども、谷口さんのいたフィリピンではですね、まさにアメリカ軍が上陸してくる直前でした。

谷口：8月の10日頃にね、みんな、飛行場と言っても、もう、一種のローラーがあるでしょ、あれで土地をならしてもね、あれは、コンクリートの立派な飛行場じゃないんだから、その整備やそういう事をやって、見方の飛行機がくるのを待っているんだけど、待てど暮らせど来ないわ。そしたら9月9日にね、40、50機がね、50、60機だったかもしれない。カラスの群れのように遠くから飛んでくるんだよね。それで、アメリカの航空機にね、「安泰だ、安泰だ」って喜んで手を振ってね、いやあ「ばんざーい」ってやりよって言いながらいたんです。そしたら、ブアーッって雨霰のように砲弾と機銃兵がさ、それで、たこ壺しか無いんですよ。それで大隊長が「谷口軍曹、たこ壺へ入れ」って、入った途端にバカーンってきた。そしたらもう、僕はもう、頭だけはなんとか

出た、だけど僕の目の前に、ダーーンと上体が飛んできた。見たら、首が無いわ、ああ。もうちょっとだったら、僕がやられている訳だな。僕はもう、●みたいに首だけは出とったんだけど、その時に 11 名ぐらい亡くなったんだな。いやあー、これが戦争だって言うんだな。「これが戦争だ」とね…

水野：はあ～、「これが戦争だと感じた」っておっしゃっていますけど、「たこ壺に入っている」という言葉がありましたね。

千葉：「たこ壺」というのはですね、土をシャベルで掘りまして、やっとな人が身を隠せるぐらいの穴を掘ったものこと言うんですけど、空襲から身を守るために、戦場の兵隊がほぼ必ずと言っていいくらい掘らされているものなんですけど、そこに入って谷口さんは助かったという事なんです。

隠れた位置の 3 m の違いで、谷口さんは助かったという事なんですけど、この空襲で滑走路も燃料置き場もすべて燃やされてしまったという事で、話の中にもありましたけれども、延べで 120 機から 130 機のアメリカ軍機が空襲にやってきたんですけども、日本の飛行機は 1 機も来ないし、

水野：待てど暮らせど来ないけど、ずーっと待ってましたんですよね？

千葉：そうですね。

水野：日本の飛行機が来るとして、

千葉：そうですね、はい。

水野：1 機も来なかったんですか？！

千葉：来なかったんです。で、来たのは敵機で、打ち返す武器も無い。ただ撃たれるがまま、という状態だったんですね。

水野：じゃあ、そこまで日本が追い込まれていて、武器が無くなっているという事を、戦場にいた谷口さんは知らされてはいなかった。

千葉：そうですね。

水野：なんとか戦えると思っていたけれどとてもそんな状況では、もう無かったんですね。

千葉：この後アメリカ軍の地上部隊が、本格的に攻撃してくる事になるんですけど、しかし、実は谷口さんの仕事はですね、「補給隊」と言いまして、食べ物や武器弾薬を運ぶ事だったんですね。実はその「補給」が全く無くなってしまったんだそうです。

谷口：マライバライという町にチームがあったんです。僕は補給隊で、ものを運ぶ方ですよ。そこに受け取りにいったら、でももうそんな無いだよ、受け取りに行ったら。だから途中で、パイナップル畑を見つけて、そこからパイナップルをとって車に積んでね、帰るとかね、途中で、ヤシのね実を取って持って帰るとかね、もう、悪い事しばっかりで、とにかく食料を取りに行ったら、仕入れの方に無いだからね。車で来たから空で帰るわけにはいかないから、そんなのはもう、民間の作っているのはね、取って帰るでしょ。ま、そういう事をずっと繰り返したわけだ。

千葉：でも、畑のものを取っちゃったらですね、そこの地元の人は困っちゃいますよね。

谷口：あの、恨めしそうな顔をして見ているけれども、よう…、向かっては来ませんよ。

千葉：食べ物が無ければ生きられないけれども、司令部は食べ物も弾薬もくれない訳ですよ。取りに行ったら無いですからね。でも、「飛行場を守れ、守れ」という命令だけはくる訳ですよ。そういう状態の中で、こんな形になった訳ですけど、フィリピンの人たちにとっては、日本軍は自分たちを守ってくれるどころか、逆に殺されかねないようなそんな存在になってたんですよ。

軍隊はやっぱり武器を持った集団だから、フィリピンの人が向かっていったってね、かなう訳が無いという状況になってますので、誰も取り締まれないという状況なんです。そうすると、人権も倫理もない、まさに集団強盗の世界になってしまったのかなという感じですが、そんな状態でアメリカ軍の攻撃はさらに激しくなっていくんです。で、司令部から「ジャングルの奥深くに入ってそこで自給自足の生活をして戦え」という命令が来たんです。

水野：食料が無いから自分でなんとかしろ!?

千葉：そうです。「そして戦いを続けろ」という命令になってまして、もう、部隊としては所属する兵隊に配る食べ物というものは、ほとんど無くなっていた状態だったんですね。

谷口：大隊長がね、「これ以上の食料も無いし、兵器も無い」と。「組織的な戦闘行為はもう出来ないから、大隊が解散します」と。とにかく食べれるものは何でも食べて、取れるものは何でも取って、「生き延びろ」と言って大隊を解散しちゃった訳ですよ、軍隊が、部隊攻撃が出来ないんだから、食料もなんにも無いし、●にやっとなら、ますます山にある、なんだ、…トカゲだとか、あるいは、あの…カタツムリだとかね、ムカデだとかね。ムカデなんか、喜んで捕まえてね、そいつを焼いて食べたりしたんだから。だからもうみんな、人の事はかまっておられない状態で、「自分がいかにして生きるか」という事だね。倒れた者をね、助けて一緒に食うって言う事は出来ないものだから、ほったらかしになるでしょ。しまいには死んじゃっている。異臭がものすごいですよ、あの、死人の臭いって言うのは。はじめは、亡くなった人はよその部隊でもね、その辺の山の草を亡くなった人のちょっと枕元に置いて、名前を言って弔ってやってたけど、もう、そんなこともできないんだよ。ポケットに何か食べる物を持っていないとか、●さんみたいに、靴がもうぼろぼろになるから、履き替えたりね。服や下着を、服を履き替えたりしてね、それを食べるのがまた唯一の楽しみになって、死人が無くなると困るって言う訳だよ、みんな。

水野：は…

千葉：遺体のポケットを探って、その中に食べ物があったら、それを食べるのが唯一の楽しみと
いうようにおっしゃっていましたが、遺体の

水野：そうになってしまうんですね、

千葉：はい、そうなんです。で、遺体のポケットを探って何があったのか？という、カビが生
えて腐った乾パンだったりしたそうです。

水野：最後の自分のお命のためにもってらした乾パンなんだろうけど、そういうかたちにな
るんですか、

千葉：はい、それを見つけて食べたということです、他にも、ご遺体の首の周りをうろつい
ていたトカゲだとか、そういった物を取って食べたそうです。

水野：「ムカデも焼いて食べた」っておっしゃいましたね、

千葉：そうですね、はい。本当に私たちの、いまの私たちの常識で言えば、本当に目を覆うばか
りの事なんですけれども、それをしなければ生きて行く事が出来ない。まさに本当に生き地獄
と言えるんじゃないでしょうか。そういう生き地獄を生み出す事がやっぱり戦争なんだな、という事
を感じますけれども、

本当に、「ポケットをあさるための死人が居なくなったら困る」という、考えが出てくるくらい
ですね、谷口さんは食べ物が無くなって、飢える。「飢え」という物が、どんなに人間性を無くし
てしまう物なのかという事を強く語ってくれました。

水野：谷口さんのお話はとても具体的で、目の前で、こう…映像が浮かんでくるような、ものす
ごくリアルに、「戦場ってそういう事なのか」って、私がいままでいろいろ聞いたお話の中で、あ
の一、ほ、本当に震えがくるような思いでいま聞かせていただいていますけれども、これが戦場と
いうものなんですね。

千葉：そうです、現実の姿なんです、実際にあった事なんです。そんな中、谷口さんは、何人か
の兵隊さんが何かを囲んでいる場所に出会ったんです。

谷口：途中でね、7～8人で囲んでいる。なんか、何かを捕まえてね、それを処理しようと、み
んなでなんか取ったのかと思って、それでよたよた歩きながら、ぐーっと肩口に見たら、兵隊が真
ん中に寝て、それで目頭に涙が溜まってるんだよな。息をどうもしているようなんだよな。「なに
しとるねん、こんな」って、そしたら、「いや、もうこれ以上つれて歩く事が出来ません」と。こ
のままね、放っておいたらね、どうせもう死んじゃう。放って置くしかない。だからせめてね、我々
がもし元気で日本に帰ったら、戦友ですからね、囲っているのは。彼の国へね、彼の遺品を渡した

いと。言って、爪はがしてるんですよ。

千葉：生きてる人の爪をはがしているんですか？

谷口：もう、僕が見れば生きてるのに、目に涙があるけどね、それから、言葉も何もでないでしょ。で、かすかな呼吸ね。それで、はがす方も涙で、見とる方もね、涙で。

千葉：生きてる人の生爪をはがすなんていう事は残酷極まりないという事のように思えるんですけども、戦場という場ではこれは、ひとつの戦友愛なのかもしれないですね。

戦地で亡くなった方の遺族には、遺体はおろか、遺骨だって戻ってくる事は少ないです。だから、このままもう死んでしまうのならば、「せめて爪だけでも遺族にお届けしたい」と。

本当は戦場で亡くなった方には、亡くなったご遺体の片手の手首を切りまして、それを燃やして灰にして、位牌としてもって帰るとい事が行われていたというなんですけれども、とても、もう、灰を入れる入れ物も無く、そういう事をやっている体力も時間もないという状況の中では出来ませんし、まだ息のある人の手首を切る訳にももちろんいきませんので、で、「自分たちは前に進まなければならない」という状況の中で、爪をはぎ取るということになったんですね。

で、そんな時一つの事件があったんです。実は、大隊が解散という事になった谷口さんの部隊なんですけど、もし、応援の日本軍が、見方の日本軍が、いま攻めてきているアメリカ軍の後ろから上陸してきて戦うという事になった場合に、自分たちが挟み撃ちにして、アメリカ軍を挟み撃ちにして戦うんだ。その時にお腹を空かしているという状況ではないので、その時の食料にするんだ、という事で、ある程度の量の乾パンをですね、乾パンが、警備の兵隊に守られて、実は保管されていたんですね。

水野：ほお～

千葉：その乾パンを巡ってこんな事件が起きたんです。

谷口：乾パン一袋ずつね、一人。それは、大隊が保管しておきました。これは東條がね、東條がもうすでにあの当時、あのころ多分大艦隊を引っさげて逆上陸する。そんなね、もう食う物が何にもないのに、まだ、まだ勝つ気持ちでおるんだからね。上官も我々もさ。逆上陸してね、来る。だから我々はね、山奥からね、下りて敵を挟み撃ちにすると、「その時の乾パンだ」と。

よその部隊が通りがかりにそれを持って逃げたら困るでしょ。だから、よその部隊に取られないように、警備しとった訳ですよ、乾パンを。

そいつをさ、同じ部隊だよ。昨日まで一緒にやっていた同じ部隊の総長が、兵隊を2～3人連れて、銃で撃ち殺すと、音がしてみんなに聞こえるからね、だから銃剣のごぼうさしで打ち殺して、そうしてその乾パンを持てるだけ担いでさ、食料が無いと、いま言ったようにね、同じ補給隊でし

よ。それが乾パンを巡って、警備している人を殺してまで逃げるんですから。飢えたらね、人間っていうのはどういう事をやるか分からないよ。うん。

千葉：敵と戦うどころか、仲間を殺す事もあったんですね。

水野：同じ部隊で、本当にもう

千葉：生活を共にしてきた仲間を、

水野：ね～、死線を越えてきた方同士がこんなことになるんですね。

千葉：そうなんです。これが戦場というものなんですけれども、そんな状況の中で谷口さんはさらに恐ろしい体験をする事になったんです。お腹を空かせた谷口さんたちが、食べ物を探していた時の事です。

谷口：あっちで●をやっているわけだね。そうすると、いい匂いがするんだね。それで、チラって見たら、ちょっと小高いところで、3～4名で飯ごうを囲んで食べてるわけだ。「ああいい匂いだな、あれは何の肉だ？」どこで捕ってきたんだろうな、なんて言って近寄って行ってさ、我々は何にも食べてないから「頼むから一切れくれんか」と、「何の肉だ？」と、俺等も捕ってね、食べたいから、ウサギか？ 大トカゲか？ その頃はね、ウサギも滅多に見なかった。大トカゲがたまーに居たりね。で、さ・・・、こんなところに野生の家畜は、家畜というか、馬や水牛が居る訳ないよ。だけど、何にも言わないんだよな。うん…。で、「頼むから、この通りだから食べさせてくれんか」って。「教えてくれんか」って。教えない。

それで、ま、…、…何の肉とも言わないで、「じゃあ・・・」執拗にぼくが、まさに泣きながら「頼む、頼む」って言ったものだから、ナカゴウを出せて、ナカゴウに一切れずつね、入れて。それで・・・、こちらは、まあ、「地獄で仏さんに会ったような気がする」と、「ありがとう、ありがとう」と。俺はもう、なんとかして「こういう美味しい肉をね、見つけて食べたい」と。だから教えたくないかもしれないけどね、教えてくれって言っても教えてくれないんだよね。

で、「何の肉」とも言わないんだよ。それで、ま、「仏さんに会った、ありがとう」って言って。それで下りて行ったらカラカラカラって、笑い声がしてね、背中に響いてくる訳だ。「なんでだろうなあ」って思って、それでもう、川で水でも飲もうって言って、谷川まで下りて、そしたら、もう首を突っ込んだままみんな死んどるわけだ。

どこかの●でね、これは末えの道だぞと、「我々はこんな状態にならないように助け合って行こうぜ」と言って、死人を一人超え二人超えして行って、そうしてもう居なくなったと思って、そこで水を飲もうとしたら、川下の方は首突っ込んでるから、ちょっとやっぱりね、もう死んじゃったのも半ば腐りかけてるんだからさ、それで、ふっと見たら、飯ごう炊さんした跡の水があるんだよ。

その跡に近づいてみたら、ああ、足の肉が取られて、やっとなるわけだ。「ああ、これだな」と、

兵隊がね、いや何の肉だか教えなかったのは、よし、「よくもこんなことをやりやがって」と言ってそれで、歩けもしないのによろよそまた上りかけてね、「奴らを殺したる」とか言って、支那事変でさんざんやった上等兵や兵長だからさ、で、僕は、いや、もう体力的にね、こっちは銃が持ちこたえられないから、一人に1丁持ってないんだよ、向こうはちゃんと持ってるしね。反り打ちを食らうから、もうここは我慢しようと、りょうをなだめて、そしてそこを去ったんだけどね、

まあ、だから…、まあ、あれで人肉を食べたことは確かだと思ふのよ、僕は。その当時は人肉とかなんか味は分からなかった。ただ美味しいっていうだけでね。ただ、そういう飯ごう炊さんがしてあって、その足で、腿で肉が取られた足がそこに捨ててあったりしたから「あ、これだな」ということ。

水野：飯ごう炊爨の跡があって、そこへ行ってみて足があった。という、それは人間の足だった。つまり、仲間の足だった、という事なんですね。

千葉：弱った人はやっぱり水を求めて小川に行くんですけれども、そこで息絶えるんですね。で、「末期の水は飲む事が出来たのか」という状態で、ま、息絶えている訳ですけれども、そんな遺体の足の肉が、削り取られていた。

水野：あ、そういうこと……

千葉：それを食べていたんだという事なんですけど、足のお肉をはぎ取られた日本兵の周りには、どす黒く血が流れていたそうです。

水野：……

千葉：この肉を分けてもらった時ですね、谷口さんたちは2週間、食べ物らしきものは何も食べていないという、本当に餓死寸前の状態だったんですね。

水野：涙を流しながら、「僕にも肉をくれ」っておっしゃったんですね。

千葉：そうです。え…、そうやって食べたものが……

水野：は……

千葉：ね…、もう、本当にそういう状況だったということで、この後ですね、本当にもう限界で、「はやく死んで楽になりたい」と言い出す仲間も出てきたということなんです。

水野：「人間が人間でいられない状況に追い込まれる」というのが戦場なんだということが伝わってきますね。

千葉：本当に、これが戦場で、まさに現実に起きていたことなんですね。で、谷口さん等はです

ね、この後「このまま死んでしまうなら、せめて戦死しよう」という兵隊も、仲間もおりまして、ジャングルを抜け出してアメリカ軍のいる方に歩いて行ったんですが、その途中で終戦になっていることを別の日本兵から知らされました。

でも、簡単にそれを信じる事は出来ませんでしたので、アメリカ軍の撒いてくる投降、つまり、出てきて捕まえる事を呼びかけるビラを慎重に見ながら、終戦から1ヶ月半経った後の、昭和20年9月の月末にアメリカ軍に投降をしたということです。

これまでね、谷口さんの対談を聞いていただいて、まさに生き地獄という体験をしてきた谷口さんなんですけれども、その後自身の体験をふまえて、戦争というもの、そして軍隊というものについて、こう話しておられました。

谷口：戦争というのはね、これは話し合いじゃないんですよ。殺し合いでね、「殺して勝つ」という事は相手を殺さなければ勝てない訳ですよ。負けるというのは大部分が殺されるから負けるんです。殺し合いなんですよ。

だから軍隊というのは、人を殺す事が、殺す事の訓練をやっているんですよ。あれは人を助ける訓練をやっているんじゃないんですよ。ところが殺せないんですよ、普通の人間は。面と向かってね、いくら相手が敵国だといってもね、殺せないんですよ。それが人間なんですよ。だけど、それを殺さないかんのですよ。だから「鬼になる」というんですよ。

相手をね、自分よりも犬畜生とみななければ殺せないです。相手はもう人間じゃないんだと、だから殺せと。そうすると殺せないですよ。お互いが人間だと思っていたら。だから「人間からね、離れる訓練をどうするか」というのが軍隊なんですよ、ええ。

千葉：その、離れさせるためにね、軍隊というのはどういう訓練をするんですか？

谷口：いや、もうね、理屈に合わない事でも何でもね、「これは軍隊教育」と言って、教育がとにかく天皇中心主義なんですよ。もう天皇が神様なんですよ。ね。我々はその神様の子供なんだと。だから神の子なんだと。世界のあれはね、獣の集まりなんだと。「だからやっつけろ」ということですよ。

千葉：あの、上官、軍隊で言ったら上役は、もう上役の命令は天皇の命令で、

谷口：そうそう。これは軍人勅語でね、「上官の命令は朕の命令と思え」と、ちゃんと詠ってあるんですよ。だから上官はね、「俺の言葉じゃないんだ」と。「天皇の言葉なんだぞ」と、自分がやっているのがね、だからもう、理屈が合おうが合わまいが、「へい、へい」と言ってやっとなあかんのやから。

千葉：あの…、人を殺してしまうような戦争から永久に抜け出して、足を踏み込まないという事が、いまの日本国憲法の精神なんですけど。

水野：そうですね、永久に人を殺してしまうような戦争には向かわない。そこには「もう永久に抜け出したんだ」という宣言ですよね。

千葉：そうです。そうなんですけれども、谷口さんは国の自衛権についてこう話します。

谷口：自衛権というのは「軍隊を持つ」ということだけじゃないんですよ。「自衛権がある」というのは、戦争じゃなくして外交でね、お互いが「自分の立場はこうでございますよ」と、「これは理解していただけませんか、どうでしょうか」と、お互いに話し合っただけでね、じゃそいつはこままでならいいと、手を引きましょと。そのかわりあんたもこの点ね、一歩手を引いてくださいと、それが自衛なんですよ。自分が生きる道なんですよ。

だから自衛権というのはね、「自衛権があるある」というけれど、軍隊持つ戦争するのが自衛権じゃないんだって。外交。商売なら商売。民間なら民間でね、お互いが、文化やいろんなものを通じてですよ、そうして和気あいあいのうちにね、人類としての幸せをお互いが感じるような交流をやると。戦争する事が自衛権じゃないんだよ。そこをね、僕は人に知ってもらってね、賛成してもらいたいんだな。

水野：はい。

千葉：谷口さんはこう話しています。今回は、93歳の谷口さんにお話を聞いたんですけども、この谷口さんのように戦場での体験をお話ししてくださる方は、実は多くはないんですよね。多くの人は、語るのがあまりにも恥ずかしい。人間性を無くしてしまったその姿を語るのが恥ずかしいということで、家族にも黙ったまま亡くなって行くんです、本当に、出来れば知られたくない自分の人生の忘れたい部分であり、本当にね、人間が人間でなくなる場所。そこを見てきたという、非常に辛い体験ですので、でも、谷口さんは勇気をふるって話をしてくれました。

それはですね、日本国憲法の第9条の平和主義が、時が経つにつれて形だけのものになって、いまのうちに原点に戻さなければ大変な事になってしまうと思われたからなんですね。本当に93歳の思いなんですけれども、

谷口さんが所属する不戦兵士・市民の会という市民グループでは、かつて14人の戦場を体験した元兵士の方々が「語り部」として自分の厳しい体験を語ってくださっていたんですけども、会が活動を始めたのは1988年のことなんですけれども、もうすでに何人かの方々が天に召されてしまいました。いまは一番若い方が85歳ということになります。

谷口さんは今回3時間以上お話をしてくれましたけれども、「まだまだ語り残さなければならぬ事がある」という風に話をされておられます。終戦から来年で70年になりますので、悲惨なこの戦争体験を語り残せる人はもう多くはありません。

38:52

水野：リスナーの方が、「いやー、いままでテレビラジオを通して初めて生の声を聞きました」と言っているんですよ。本当に生々しい

平野：改めて、極限状態のね、凄惨な状態というのを…、私は聞きながら終始、「自分だったらどういう行動をとったろうか」というのを、ずっと思い続けて聞いていたんですけどもね、ふと、その今の為政者にタイムスリップをして、その場に連れて行きたいなという思いに駆られましたよね。

水野：私だったら、あなただったら、本当にその、人間性を失わずにいられるんですか？

平野：これは戦争というよりも、飢えと病気との戦いですよね。武器を持って戦っている状態じゃないですよね。そういう状態にまで追い込まれる極限の状態というものをですね、一兵士で、本当にもう、逆に言うと無力感に苛まれますね。

戦史をね、ちょっと紐解くと、このフィリピン戦線というのは、一番犠牲者が多かったんですよね。太平洋戦線の中ではね、47万人の方が亡くなっていて、戦争が終わっても13万人の人がまだ戦争状態を続けていたと。最後は捕虜になる方が多いんですけども、作家の大岡昇平さんが同じ、人の肉を食べた事をフィクションで書かれていて、『野火』という小説でですね、私も読んだことがあるんですけど、これはあくまでも自らの経験をふまえたフィクションなんですけれども、今の谷口さんのお話は、よりこう、生々しくね、我々の胸に刺さりますよね。まだまだ他にも厳しい状態があったと聞きます。

兵士のお尻の肉をですね干し肉にして持ち歩いて食べ合ったりとかね、フィリピン人の現地の女性の腹を切り裂いて肉を食べたとか、という証言はあるんですけども、私は直接聞いたのは本当に今日初めてですね。あの一、まさにこう、「戦争というのは人を獣の集団にさせてしまうな」という思いですよね。

水野：そうですね。その、武器を持って戦う、武力を使うということが、いかに、「人間であっては出来ない事」か、「人間から離れて行かなければ出来ないんだ」っておっしゃっていましたよね。そういう道具でもって、ね、平和を構築できるのか？って、

平野：一兵士は、この時はもう実は戦争の対境から消したんですよね。全体某空拳というものがサイパンの玉砕でですね、もう本土にB29が東京に現れたんですよね。それでもフィリピンの島ではこういうことを繰り返したと。本当に戦争の指導軍人と兵士のね、落差というか、本土決戦だと叫んでた人たちのこの比較ぶりですね、これもちょっと思いをいたしたいなと思うんですよね。

水野：今日語っていただいたものを聞かせてもらって、本当に残りますね、これは。

千葉：はい、

水野：よくぞ語ってくださったと思います。集団的自衛権の話をしていた時に、いくつもの事例というものが出されましたけれども、いかにそれが机上の空論だったのか、今日の谷口さんのお話がいかに貴重であるかということを感じました。**千葉**アナウンサーのレポートでした。どうもありがとうございました。

リスナーの方がいろいろ書いてきてくれました、感想を。

——戦争体験をした父が5月に亡くなりました。海軍だったんです、父親は。船で爆撃を受け、足に破片を残したまま亡くなりました。隣にいた方は即死だったそうです。戦場では普通の方法ではなかったように思います。生き残った人も次々と亡くなり、父の戦友は一人だけになりました。

あるいは、

——戦争体験を聞ける機会は本当に貴重となってきましたね。でも現実には現在進行形で戦争がもたらす悲劇が続いていますよね。ただ、戦争体験が無い私たち世代としては、貴重な体験談を自分自身のDNAに刻み込んでおかなければ……

こんなふうに言ってらっしゃいます。

平野：今日の谷口さんのお話の中で、一番最後にあった、自衛権というのは軍隊を持つ事だけじゃなくて外交でお互いの立場を理解し合うと、この体制を強調されてましたよね。これを我々は重く受け止めるべきじゃないかなと思うんですけどもね。

水野：平和を構築するための「戦いでの自衛権というのは、それは無理なんだ」とおっしゃいましたね。

平野：ところが、例えば今の安倍政権はですね、隣国に対して「対話のドアは開かれている」と言うだけで、具体的に何も理解する行動をとってないですね。むしろ、地球の裏側まで行ってですね、隣国の脅威を強調するようなことをやっていますよね。それをまた喝采するナショナリズムというんですかね、国内でも高まっていると。いう印象が強いんですね。

水野：安倍さんは、それは、「国民の命と平和な暮らしを守るためのものなんだ」という、おっしゃりようなんですけれども、

平野：でもそれに同調して、かつて自衛の名の下に戦争が始まった訳でしてね、やっぱり我々メディアが心しておかなければいけないのは、ナショナリズムをあおるような熱狂に組してはならないと、いう、こう、自戒ですね。その事を今日は強く思いました。

リスナーの方は

——全滅の事を玉砕と言い、敗戦を終戦と言い換える言葉の、ある意味伝統みたいなものがあり

ますよね。積極的平和主義という言葉に危うさを感じる

というふうにメールをくださいました。今日の谷口さんの証言を皆さんどんな風に受け取られて、そしてこれからの日本はどうあるべきと感じられたか、また来週の放送するラジオもお聞きください。

■ 8月15日（金）放送分 41:45

【16歳の兵士～戦争に奪われた青春～】

MBS 報道するラジオ <http://www.mbs1179.com/hou/>
新保風子記者

5:25～<http://youtu.be/cEro8XccUhs?t=5m25s>

報道するラジオ、先週は元兵士の93歳の方の証言をお送りしたんですが、今日は戦争の貴重な証言を再びお送りするんですが、今回は16歳という年齢で戦場に駆り出された方の証言です。16歳って、高校生ですよ、まだ。いまで言うところの高校生、高校1年ですか、そんな人が駆り出された、その時の現実を語って下さっています。ぜひ、お聞きください。

水野：今日の報道するラジオ特集テーマは「16歳の兵士～戦争に奪われた青春～」です。報告はMBSの**新保風子**記者です、こんばんは。

新保：先週に引き続き不戦兵士・市民の会という市民グループの方にお話を伺ってきました。このグループは、元日本兵の方々が二度と戦争が起きないように、自分が戦場で体験したことを後世に語り継ぐ活動をしています。今回は7月に横浜で行われた元日本兵の方の講演会に参加してきました。お話しされたのは猪熊得郎（いのくま とくろう）さんという方です。猪熊さんは現在85歳で、終戦の1年前の1944年4月に中学を卒業したばかりのまだ15歳の時に初年兵に志願したそうです。

水野：15歳で志願、はい。

新保：で、当時はですね、男は20歳になると徴兵されました。少年兵というのはそれよりも若い14歳から19歳の少年たちで、自ら志願して兵士になった人達なんです。短期間の訓練で戦場に送りだされ、特攻隊で亡くなった人の中には少年兵も大勢いたそうです。

まずは猪熊さんに少年兵に志願した理由を聞きました。

猪熊：「いずれは、アメリカが日本の上陸することが起こるかもしれない。一体この日本はどうなるんだろう？」というふうに少年は考えだします。「アメリカの兵隊が日本に上陸してきたら、

俺たちの家族はどうなるんだろう？」少年たちはそういうふうに考えたんです。

そして、15 ですから、中学 3 年の 2 学期ですか、2 学期の終わりに父親にですね、「少年兵に志願する」と。当然親はこれに賛成する訳はありません。親は必死になってですね、「20 歳になれば徴兵制ということで兵隊に行くんじゃないか」と。「あと 4～5 年のことなんだ」と。え・・・、3 日間父親と話し合いをしましたけど、とうとうですね、4 日目からですね、ただ父親の顔を黙って睨みつけていると。遂に仕方がなしに父親もですね、「そんなにお前は兵隊になりたいのか」と、「仕方がない、いきなさい。しかし、命だけは大切にいなさい」と、そう言った父親のさびしそうな顔をいまだに忘れることが出来ません。

入隊した時に戦友たちに聞いてみましたら、3 人に一人ですね、当時の 3 人に一人の男の子たちは、家族の反対を押し切るために内緒で父親のハンコを盗んで志願書を書いて、そして、内緒で入隊試験を受けて、そして入隊が決まると軍から文書がきますね。その時になって初めて家族が知ると。

これは当時の戦争中であっても、「戦争に賛成する」と、「万歳万歳」と言っている大人たちも、いざ子どもが兵隊に行くとなると賛成する大人というのは一人もいませんでした。ですから、どこの家でも家族との間で悶着が起ると。

水野：家族も必死に止めたんですね。

新保：そうですね。特に猪熊さんは、男の子 4 人、女一人の 5 人兄弟の 4 男だったそうです。で、母親は早くに亡くなっていると。上の 3 人の兄たちはすでに陸軍や海軍に入隊していて、兵隊に取られていた訳なんですね。最後に残ったまだ 15 歳の猪熊さんまで志願するというので、父親は大反対したそうなんです。

当時、1944 年というのは神風特攻隊が初めて突撃した年で、サイパン島で日本軍 3 万人が玉砕。つまり全滅した頃なんですね。戦況の悪化によって、兵士として戦える年代の男というのも少なくなりましたので、徴兵を猶予されていた学生たちも「学徒出陣」として戦場に行きました。

その敗戦濃厚の状況で、今でいう高校生ぐらいの少年たちが戦地に送りこまれていたんですね。で、猪熊さんの調べなんですが、少年兵の数は 1930 年から終戦までの間に 42 万人にのぼって、

水野：そんなにいらしたんですか?!

新保：はい。しかもそのうち 30 万人というのは終戦間近の 1944 年以後の採用だそうです。そしてその後猪熊さんは航空通信学校で 9 ヶ月の訓練を受けて、1945 年の 4 月に満州に配属されました。

で、満洲国というのは日本が満州事変で占領した土地に作り上げた傀儡（かいらい）国家ですね。しかし日本国内では満州のことを「五族共和の王道楽土」と言って、「五つの民族が平和に暮らしている楽園のような場所だ」と宣伝されていたんです。猪熊さんも実際にそう信じていて満州に行

き、現実を知ることになります。

猪熊：満州国というのは「王道楽土」といった訳でしょ。ところが日本人はふんぞり返っていて、きたない仕事はみんな中国人がやっていて、日本兵なんかだつてね、例えば日曜日に街に出る。電車に乗れば無賃乗車だね、物売りをやっていたら、先頭のやつが話しかけている間に後ろの方の奴がみんなかっぱらうとかね。とにかくそれはね、日本軍隊の加害行為というのはね、やっぱり、略奪、暴行、強姦ね。ただそれをみんな伝えただけで、話さないだけでね。あれがやっぱり植民地っていう実態でしょうね。

記者：従軍慰安婦の方々の慰安所の問題なんですけど、そういう場所っていうのは軍隊の近くには必ずあった？

猪熊：軍隊の近くには必ずあります。

記者：どんな感じのところだったか分かりますか？

猪熊：こっちは傍へ行くのが嫌だね。だいたい・・・、見に行こうと思って近くにはいったんですけども、ちょっと遠くから見てね、日本の兵隊が休みの日ですよ。並んで待っているんですよ、ベルトに手をかけてね。やっぱり少年兵としての潔癖感がありますからね、「これは何事だ！」と・・・。

水野：は一・・・慰安婦についてもその証言がありましたね。

新保：はい。「日本はアジアの平和のために戦っているんだ」と教えられてきた**猪熊**さんだったんですけど、実際には日本兵は満州で略奪・暴行・強姦をしていたということに非常に大きいショックを受けたそうです。そして、軍の理不尽さを経験するこんな出来事を経験します。

猪熊：最初の外出のときです。最初の外出といっても私たちは少年兵ですから、まだ10代でした。今でいう高校1年ですね。外出するときに服装検査がありました。「突撃一番を持っていないと外出させない」って言うんですよ。突撃一番というのはサックの事です。避妊具の事です。「これはいったいなんだ」と。それで少年兵ですから純粋ですから抵抗した訳ですね。

日本帝国陸軍の軍人が、「その“突撃一番”というサックを持って外出をして慰安婦を買ってこなければ、立派な帝国軍人になれないのですか？」って、こうやったわけです。それで上官は烈火の如く怒りましてね、「上官を侮辱するのか！」と「女を買うのは当たり前だ」と、「女を買えない奴に敵が殺せるのか」と、ぶん殴られて、蹴っ飛ばされて、踏みつけられて、血だらけになったのが、私の初めての外出の時でありました。

日本の陸軍のあるところ、日本の軍隊があるところ、慰安婦がいて、慰安女がいて、軍隊の中では立派な兵士にするために、民主主義もなければ自由もない。ただ無批判に無感動に敵を殺せる兵隊を作る。敵を殺せる兵隊というのは常識があつては立派な兵隊になれない。そういう中でリンチ

があり虐待があり自由なんて無い無い。だからそれを憂さ晴らしに兵士たちは慰安所に求める。そして慰安所に兵士たちを送り込んで、軍人の戦闘精神をもたせる。これが日本軍隊の真実の姿であります。

水野：はあ～・・・、「慰安所がどういうものだったか」というのを本当に赤裸々に語ってくださっています。

新保：まだ 15 や 16 の少年に「慰安所へ行って女を買え」というんですよね。拒否すると「女を買えない奴に敵が殺せるか！」と言って殴る蹴るの暴行をした訳ですよね。それが日本軍の姿だった訳です。そして猪熊さんは、なんと軍の飛行場でほかの少年兵の訓練の様子を目撃することになります。

猪熊：飛行場に行きますと、少年飛行兵がいます。少年飛行兵と言いますのはだいたい同年代ですね。15 歳から 19 歳の少年たちで、これが飛行機で訓練をしているんですね。それで何の飛行機で訓練しているか？ と言いますと、「赤とんぼ」と言いましてね、二枚羽のね、あの飛行機で訓練しているんですよ。それで、同じ少年たちですからね、「おまえ、あんな飛行機で訓練しててどうするんだ？」と「ソ連の飛行機がやってきたらどうするんだ？」と言ったら、「飛行機がこれしか無いんだ」と。「これしか無いたって、それで戦えるのか？」って言ったらね、いや、ソ連の飛行機が来るって分かったらですね、上空に待機しててですね、「上空から敵の飛行機にぶつかるんだ」と言うんですよ。「ぶつかって当たらなかつたらどうするんだ？」って言ったら、「そのまま突っ込むんだ」と言うんですね。これが私たちと同じ年代の 15 歳から 17 歳のですね、少年飛行兵が一生懸命訓練をしてたんですね。

新保：お話の中に出てきた「赤とんぼ」って言うのは、二枚羽の練習用の飛行機のことなんです。その頃には最新の飛行機というものも少なくなっていたので、練習用などしか残っていなかったんですね。なので「その飛行機で敵に体当たりして死んでこい」と、高校生ぐらいの少年たちがそんな訓練をさせられていた訳なんです。そして 8 月、日本は終戦を迎えます。

猪熊：8 月の 9 日に、「ソ連が満州の領空に侵入してきた」ということで招集がかかりまして、そこで暗闇の中にロウソクを灯してですね、「関東軍は最後の 1 兵まで戦う」「関東軍がもし敗れたならば長白山に集結しよう」と。要するに関東軍が負けたら長白山に集結してゲリラ活動をやろうと、で、それから戦闘態勢を固めましてね、私のところは 8 月 17 日まで戦いまして、8 月 18 日に停戦の命令を傍受しまして、そして初めて「戦争に負けたんだ」と。

とにかく戦争が終わったときに真っ先に逃げたのは将校ですね、上官ですよ。飛行場にいたらですね、「最後の 1 兵まで戦う」と。「ソ連の戦車に戦うんだ」と。飛行機を出してくれって言うんだからね、兵隊たち、しょぼんとしていた兵隊たちが喜んでですね、飛行機を出してきて、将校が飛んでいくのに、こう手を振ったんですよ。

空を 3 回旋回してね、ソ連の方向に行くんじゃないんです。みんな日本に向かって飛んでいくんですね。士官学校の学生がですね、満州で教育をしました。これが真っ先に日本に逃げ帰ったんで

すよ。「日本の再建のための国土復興のための有為な人材だ」じゃあ我々は有為な人材じゃないのか!?

この連中はみんな真っ先に、飛行機がある限りですね、上官たちはその飛行機に乗って、「殺せ殺せ」「死ね死ね」と言った将校たちはみんな日本に帰ってしまった。あのときに私はですね、「日本は負けたんだ」と。「負けるべくして負けたんだ」というのを骨身に沁みて思ったですね。

水野：あー…、こんな状態だったんですか。

新保：今まで「敵を攻撃して死んでこい」と命令していた将校や上官だけが、敗戦した途端に先に日本に帰ってしまったんですよね。でも下級兵と民間人だけが残されたんです。その後**猪熊**さんたちは、やってきたソ連兵に「東京ダモイ」「東京に帰れる」と言われて、半信半疑貨物列車に乗り込んだそうです。しかし列車はどんどんどんどん北へと向かって、ソ連領へと連れて行かれました。猪熊さんは捕虜として収容所に入れられて、製材工場で過酷な肉体労働を強いられます。

猪熊：えー、シベリアはですね、2月の平均気温がマイナスの20度から30度です。冷凍庫の温度がマイナス20度ですね。これよりも寒いところで作業をする訳ですから、私らの収容所で言いますと6人に一人死にしましたけども、ほとんどが冬の間ですね。

栄養失調、下痢、ということで隣の戦友たちがバタバタと倒れていく。昨日まで隣に寝ていた戦友が、ある日突然立ち上がって「日本に帰れるんですね」「汽車が出るんですね」「お米が食べられる」「ご飯が食べられる」「おかあさん」そう言ってバタッ！と倒れるんですね。そういう戦友の声が今でも耳に残っています。

そうして戦友が倒れると、医務室の前に遺体が並べてあります。遺体が並べてありますけれども、冬寒いときには凍っています。凍った死体が並んでいます。翌日の朝になると、死体は全部裸になっています。着ているものは、日本の戦友たちがその遺体の衣服を剥いで、パンと代えてなんとか生き延びたんです。

で、戦友が亡くなるとですね、製材工場でしたから、え…、棺桶を作っておきましたけれども、背の高い戦友が亡くなると、足が入らないんですね。ですから、凍っていますから、斧でポンッ！と叩くとボキッ！と折れてですね、その棺桶の中に入れることができます。山へ持って行って穴を掘るんですけども、シベリアは凍土ですから、1mまで凍ってますね。ですから30cm掘るのがやっとですね。30cmというと、棺桶を入れるのが精一杯ですね。

ですから、春になるとですね、山犬が掻きむしってですね、食い散らしていると。そういう状況に何体も何体も死体が放り出されているという状況でしてね。ですから、自分が生きていくために、なんとしても生きていかなければならないです。「生きて帰りたい」と、「家族に会いたい」と。と、隣の戦友がね、下痢すると嬉しくなるんですよ。「ああ、こいつの飯が食える」できることなら明日もあさっても、こいつの下痢が治らないでくれたらいい。これが本当の姿なんですね。なんとしても生きて帰りたい。生きて帰るためにはどうやって生きていくか。とにかく、他の人のこと

なんか考えていられない。それが本当の姿だと思うんですね。

水野：シベリアに抑留された経験を、こんなに具体的に克明に生の声で伺ったのは、私は、初めてです。

新保：私も初めてで、非常に過酷な状況の中で労働させられていたんだなということを、このお話を聞いて初めて知りました。シベリア抑留でおよそ58万人が捕虜としてソ連に連行されて、そのうち6万人が死亡したと言われていています。**猪熊**さんも2年4ヶ月の間、収容所で暮らしていたんですけれども、これはまだ短い方なんだそうですね。中には10年以上収容されていたという方もいるそうです。

水野：平野さん、猪熊さんたちはやっと終戦を迎えて、「ふるさとに帰れる」と思っていた貨物列車に乗ったら、そこはソ連領だった。そして、今お聞きいただいたような、壮絶な状況の中に置かれて、だけど、終戦したにもかかわらず、**猪熊**さんの場合で2年4ヶ月。長い方で10年程って。なんでそんなシベリア抑留が続くのか。

平野：そうですね。そもそも、7月26日にもう、ポツダム宣言を受諾されているんで、日本としてはもう、武装解除を早く最前線に伝えなければ、

水野：もっと早く伝えるべきだったんですね。

平野：ところが一部の軍部がですね、国体の保持ということにこだわって、「天皇制を保証してくれ」と、天皇とずっと最後まで交渉を続けるんですよ。しかし昭和天皇は「もう限界である」ということで「はやく戦争を終わりたい」という意向を表明をしたにも関わらずですね、引っ張る訳ですよ。

ですから、もう本来であれば避けられているシベリア抑留なんですよ、武装解除して。しかも、当時は百万人以上の民間人も満州にいた訳ですよ。その人たちも略奪されてですね、時には強姦されて、もう本当にその…命からがらですね、一部の人しか帰れなかったという過酷な状態が続いたと。これはもう一部の戦争指導者の判断の、言ってみれば猛進ですよ。ソ連とは中立条約を結んでいたものですから、「ソ連は攻めてこないだろう」と、ずっと過信をしてたんですね。

だけど歴史を振り返れば、その年の2月、半年以内ですね。ヤルタ会談でソ連はドイツが降伏した3ヶ月後に、対日参戦をするということを3国でもう決めてたわけですよ。それを日本は全然察知できずにですね、ソ連に、逆にですね、アメリカとの和平工作を依頼するようなね、トンチンカンなことをやっちゃっていると。こういう本当の指導部のですね、あの――、

水野：情報のなさ、判断ミス、

平野：猛進・過信ですね。

水野：そうですね、やっぱり猛進過信が招いた判断ミスということになりますよね。

平野：そういう事が逆に浮かび上がって、ま、その犠牲者、と言わざるを得ないんですけどね。

水野：そしてその間に命を落とされた方が本当の大勢いらした。

平野：ええ。民間人でも 18 万人の方が亡くなっていると。

水野：は～

平野：兵士の方も本当に大変な抑留経験をされたんですけれども、それはもう逃げ惑う。朝鮮半島まで来てですね、時には集団自決までして、「もうだめだ」という事で川に飛び込んだりして、この悲劇の話は本当に数えきれないほどあるんですよ。

水野：ん～、本当は防げたのに。

平野：ええ。

水野：「じゃあその責任はいったい誰にあるのか？」って、それは本当に言いたくなりますよね。

平野：でもそもそもこの満州国の成立というところから、今回のアジア太平洋戦争というものを語らなければならないと思うんですよ。やっぱり、日露戦争で獲得した満州の権益を守ろうとして、日本の国土を超えて、海を越えて朝鮮半島、さらには満州にまでですね、国防権というものを生命線として維持しなければならないということで、要するに、「守りのために海外国家を作った」というところからですね、もう誤りがあるんですよ。で、そこにどンドン、中国の人たちの土地を収奪したりですね、財産を略奪したりですね、そういうことがまかり通った歴史がある訳ですよ。

水野：そうですね、そこを分かっておかないと、

平野：そういう歴史を、いわゆる加害責任としての歴史を日本の戦後教育はほとんど教えてこなかったと。そういうことが今の、その、「戦争賛美」とかですね、犠牲者を「英霊」とか言ってね。私にとってはもう、「犠牲者」と思われるんですけれども、そうやって自省しない国になってしまった印象がですね、もとをたどれば、私は満州国に元凶があるんじゃないかなと思っているんですけどね。

水野：いろいろ伺うと、そうか、そういうことで、シベリア抑留で長い時間をね、本当に費やされたんだなど。だんだん分かってくるんですけど、猪熊さんの場合は、**新保さん**、2年4ヶ月収容所の暮らしが続いて、その後、どうなられました？

新保：その過酷な収容所での暮らしの後、ようやく日本に帰国できる事になり、猪熊さんたちは港に近いソ連のナホトカの収容所に移されました。

猪熊：で、なんとか私は生き延びることができまして、昭和 22 年の 11 月に帰って来ることができました。帰るときはですね、ナホトカの海から船が出るんですけども、ナホトカの収容所ってというのは海岸につながっているんですね。ですからナホトカの収容所に入ってきますと、みんな一斉に砂浜に駆け出しまして、海の際に行って手を海に突っ込んでですね、「ああ、この海が日本につながっているんだ」と、「この海の水が日本につながっているんだ」と、そういつて考えるんですね。

そして、そのまま軍国主義の考え方がまだ残っています。「捕虜になってしまった」と。「捕虜なんて恥ずかしい事だ」と。「家族たちはどんな肩身の狭い思いをして待っているんだろうか」「家に帰ったらなんて言おうか」と、「ただいま帰りました」と、「捕虜になっていました」と言えるかと。

そしてそれが過ぎるとですね、戦友たち。一緒にいるはずの戦友がいない。……。 「あいつはどうして帰っていないんだ」と、「あいつはなんでここに居ないんだ」と、「あいつの家族になんて言おうか」と、「なんて言えるのか」と、「私は生きて帰る。だけでも戦友はここに居ない」「私の家族が喜ぶのと同じように、戦友たちも待っているに違いない」と。「なんて言おうか」みんな話し合いました。結局は「戦争があったから亡くなったんだ」と、「戦争が無ければ生きて帰れたんだ」と、それを言う意外に無いんじゃないかと。そう思ったのがナホトカで考えたことでした。

水野：はい……、

新保：1947 年の 10 月に、ようやく猪熊さんは帰国することができました。しかし東京にあった家は空襲で跡形も無くなっていて、一人親の父親も亡くなっていたそうなんです。また、一つ上の兄も人間魚雷、海軍の特攻隊要員として、沖縄の出撃の途中に、まだ 18 歳で戦死していたことが分かりました。

最後に戦争体験を語る猪熊さんの思いを聞きました。

猪熊：つまり戦争体験というと、いわゆる被害体験になっているんですよね。被害体験も大変大切なんですけれども、あの一、日本が、被害者の立場だけだった訳じゃないでしょう。つまり、日本は他国の人たちを苦しめる加害者だったんだと。つまり単なる被害者じゃなくて、加害者に加担した被害者。あるいは加担させられた被害者。という立場だと思うんですよね。

それは当然中国にしてみればさ、自分の国に攻め込まれて、殺されてね。それは日本兵がやった訳なんですから。実際にはね、一生懸命「日中親善」だって言われても「自分のおじいさんはね、日本人に殺された」という思い出は心の中に残っている訳ですからね。

つまり、他国の人たちは日本の戦争、武力によってね、どれだけ苦しめられたのか、悲しめられたのかということほとんど抜けている、8割方抜けててね、被害者としての立場しか残っていないと。そこに加害者として加担させられた被害者という立場が入ればね、もっともっと深くね、相手の国を理解することができるし、共感することができるのではないかと。

水野：：いま、猪熊さんがおっしゃった「加害行為に加担させられた被害者」という立場をちゃんと自覚の方がいいと、これはどういう思いでらっしゃるんですかね？

新保：はい。猪熊さんが満州で見たように、日本軍は満州で強盗、略奪、強姦など加害行為をしてきたんですよ。つまり加害者である訳なんです。しかし、そうした日本兵というのも、国家によって戦場に駆り出され、そうした加害行為に加担させられるような状況に追い込まれたと。そういう意味では兵士ひとりひとりも被害者だと言えるんですね。

水野：：そうですね、あ・・・、あの、今回ね、取材を通して、新保記者はまだお若いですけど、生まれたのは昭和何年ですか？

新保：平成元年なんです。

水野：：あ、平成生まれなんだ。平成生まれの新保さんが、今回16歳の兵士の体験を聞いて、どんな事を感じました？

新保：いままでも、学校の授業などでも戦争の体験を聞く機会というのはあったんですけど、空襲で家を焼かれたとか、あるいは広島や長崎で被爆をしたという辛い体験ですよ。ただそれは「日本が被害を受けた」というお話だった訳ですよ。で、こうして日本の加害について体験談を聞いたというのは今回が初めてだったんですよ。

猪熊さんのお話にもあったように、一部の日本兵というのは中国やフィリピンなんかで、強盗や略奪とか強姦とか、むちゃくちゃしていた訳ですよ。もうそれがすごく、こう、当たり前の事なんですけど、「日本が加害者」というのがすごく驚きでした。もちろん、わたしが小中学生の時は、社会の授業で戦争の事を勉強するんですけど、でも、「日本の加害」についてって詳しく書かれてないんですよ。「南京大虐殺」についても、私の記憶ではページの半分ぐらいしか書かれていませんし、その後にやっぱり、日本の被害について大きく、何倍もの時間をかけて習う訳ですよ。

修学旅行で広島へ行けば、原爆のことを習いますし、そうやって、そうした教育の中で私は、日本が受けた被害のイメージというのがすごく強かったんですよ。で、正直これまで、中国や韓国ってというのは、歴史認識問題に強くこだわっているというのがいまいちピンとこなかったんですけど、「もう、戦争が終わって70年近くたつのに」って正直思っていたところがあったんですけど、このお互いの「感覚のずれ」みたいなものが、「日本が加害者であったんだ」という意識が、やはり欠如しているからなんじゃないかなと、今回の話を聞いてすごく強く思いました。

水野：平野さん、リスナーの方がね、今日聞いてて、「今日の放送こそ小学校、中学校、高校の

歴史の教科書に書かなくてはならない事じゃないですか」

平野：そうです。本当に**新保**さんがおっしゃるように日本の歴史教育というものを、きちんと、自分がしたことに向かい合っていないですよ。逆に言えば「もう無かったことにしよう」ということまであってですね、**安倍**さんは「侵略の定義が定まってない」みたいなことを先日まで言った、と。これはもう、明らかに侵略をしている訳ですよ。武力でもって他国の主権を奪い取ったということがもう侵略なんですよ。そんな基本的なことさえ、一国の総理が誤った言葉しかできないという国をもう一回改めて、我々は批判して、考えるべきじゃないかなと思いますね。

水野：他のリスナーの方は、「今日の話聞いていた亡くなった叔父のことを思い出しました。叔父もシベリアに抑留されていて、生前「シベリア抑留について教えて」とお願いしたんですが、いつも笑顔を絶やさない温厚な叔父の笑みが消えて、一言「いろいろあった」とおっしゃっただけなんだそうです。本当に真実を知るのには難しい。お辛い体験ですけど…。

平野：今日のお話は大変貴重でしたね。

水野：そうですね。今日は**新保**風子記者の報告でした。

<http://bit.ly/lp2xial>